

アリスイの土中での営巣記録

小杉和樹¹

1. はじめに

アリスイ (*Jynx torquilla*) の日本国内における営巣場所としては、樹洞、樹幹のさけめ、キツキ類の古巣、人口巣箱などが知られているが (清棲 1978)、今回、土中での営巣を観察したので、その記録を報告する。土中の営巣例は、わが国では比較的珍しいことと思われるが、ヨーロッパでは壁や川岸などで普通に観察されており (Cramp 1985)、特異なものではないようである。

2. 営巣地

営巣地は北海道利尻島北西部の海岸に面した、採土によってできた崖地であった。そこでは、ショウドウツバメ (*Riparia riparia*) が40巣程のコロニーを形成しており、アリスイの巣穴はその中にあった (Fig. 1)。崖地は、道路と近接し、営巣期間中多くはないが漁業関係者の往来があった。

3. 繁殖、営巣活動の経過

営巣を最初に観察したのは、1989年7月15日であった。この時にはまだ給餌活動を行なっておらず、抱卵期の後期であったと思われる。

7月21日から給餌活動を観察したが、実際には7月16日頃から始まったと推測される。餌はアリ (種不明) の幼虫、成虫で、この日の観察時には1時間に6回給餌した。

7月24日からは、給餌が1時間に3回となり、巣穴の入口に行ってもすぐには入ろうとしなかった。7月30日にはその傾向が一層強くなり、この日親鳥がふんを持って出るのを観察した。

8月5日に、ヒナが巣穴から顔を出すのを観察した。親からの給餌を持っているようで、巣内の壁を舌でなめていた。親鳥が、速くで鳴くだけで給餌しないしていると、ヒナは巢外に転落したが、羽ば

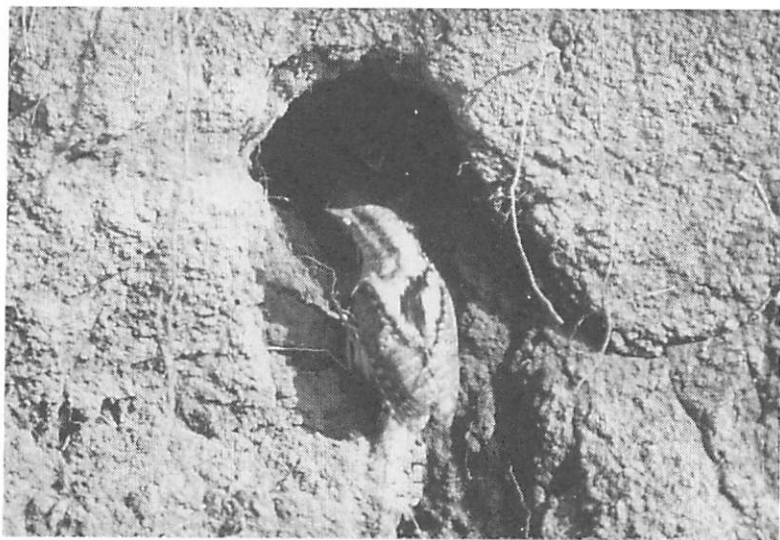


Fig. 1. An adult *Jynx torquilla* sitting on the entrance of the nest.

たきと脚で巢内に自力で戻った。ヒナは、すでに親鳥と同じ羽色になり、尾羽だけがまだ短かった。その後、親鳥は少量の餌を与えたが、ヒナはしばらくは鳴き続けていた。このことから、巣立ちはこの日の朝からはじまり、このヒナが最後の1羽であったと思われる。しかし、日没までの観察中、このヒナは巣立ちしなかった。翌8月6日の観察では、親鳥は観察されず、巢内にヒナもいなかったの
で巣立ちしたと思われる。

営巣した巣穴について、ヒナが巣立ちした時点で巢内を観察したが、入口が出入りで横径9cm、縦径7cmと大きくなったことを除けば、ショウドウツバメの巣穴と大きな変化はなく、アリスイはショウドウツバメが掘った穴をそのまま利用したと思われる。ただし、他の巣穴と比較した場合、奥行きがそれぞれによって違うものの、中でも70cmと深いものを利用していた。また、この巣穴近くにイタドリ
の地下茎が垂れ下がり、出入り時の止まり木として利用されていた。

引用文献

- Cramp, S. (ed). 1985. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Birds of the Western palearctic Vol. 4. Oxford Univ. Press, Oxford.
清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑. 講談社, 東京.

1. 〒097-04 利尻郡利尻町杓形字富士見町

A nesting record of the Wryneck *Jynx torquilla* in clay cliff

Kazuki Kosugi¹

In July and August 1989, a pair of the Wryneck *Jynx torquilla* was observed nesting in an old nest of the Sand Martin *Riparica riparica* on a clay cliff along the coast of Rishiri Island, Hokkaido.

1. Fujimi-cho, Kutsugata, Rishiri, Hokkaido 097-04

1989年11月15日受理